

与論島の活性化について、産業の活性化という面から述べたい。

与論町の現状についての講義と課外時間の体験を通して抱いた感想は島外に頼りすぎている、ということの一点に収束する。

それは多くの部分で観光に見られる。行政からの講義でも観光産業からの講義でも、観光に力を入れていることは伝わってきた。しかし本来観光というものは余程有名であるか大規模で持続的に集客が見込めるものでなくては主要産業の一翼を担うことはできない。それに、観光に傾倒しすぎて環境を破壊してしまったり、その他市民のための政策がおろそかになってしまったりする事例は数えればきりがないほどある。

また、観光に投資しても一過性の現象に賭け過ぎて失敗してしまうことも多い。例えば、これから外国人観光客の訪問が予想されるからそれに対応するために外国語が話せるスタッフの雇用や多国語を用いた看板・パンフレット制作・ホームページ制作に取り組もうということになってそこに多額の資金をつぎ込んだとしても、外国でのブームが過ぎてしまえばそれらは無用の長物と化してしまう。人々のブームの規模を予想することは難しく、対応した頃にはすでに熱が冷めていて、あとにはキャパを超えるインフラ等の運営に苦しみられるという図式は与論島でも 1975 年から 80 年代後半でも見られたことだろう。

確かに観光は単純に外貨を得ることができ、産業の弱い地方自治体ではその一発逆転を狙いがちではあるが、多くの場合で大規模な成功には結びつかない。結局自治体が求めるべきは強い産業基盤であって、観光に大きく重きを置くのは奥の手であるように思う。

漁業はある程度島内で水産物の自給が達成されているようで、鹿大とも提携して事業を進めているそうなので産業としての強さは達成されていると思う。

農業に関していえば、換金作物に傾倒しすぎていて、適地適作の考えにはなじむのであろうが、果たしてそれが長期的に見て持続的なのかという観点からは疑問が残る。非効率ではあることは重々承知でももう少し自給的な農業に活路を見出してもよいのではないか。平成 27 年度版町勢要覧（与論町）※でみると島内土地利用のうち 4.9%が田として利用されている。また、研修で訪れた民族村の案内をしてくださった方のお話では過去には与論島でもコメや小麦は各自自給できるほどには生産していて、効率さえ求めなければある程度の作物は作れたそうである。つまりは河川からの農業用水の供給はなくともコメ等文化生活上必要な農作物の生産は可能なわけで、フェリーによる島外からの供給の断絶が続いた際には食糧供給が厳しくなるという事態はある意味換金作物に頼りすぎた農業政策による自業自得ともとれる。また、台風の被害があること、効率的に食を賄うことを考慮すると換金作物に頼った農業は現実的ではあるが、食糧自給率の低下が問題視され、農のあり方が見直されつつある日本の現状と逆行する行為に見える。

観光と農業の産業の打開策として挙げるのは「島らしさ」にこだわることだ。

「島らしさ」なんていい加減で勝手な概念を押し付けるな、といわれることは百も承知ではあるが、離島を目指す観光客の大部分はきれいな景色と都市部とは対照的な人の温かみ、彼らの中で勝手に創造されたステレオタイプな「島らしさ」を求めているのではないか。これは離島に旅行する学生との接触で得た私感にすぎないが、きれいな海が見たいだけの層はその他離島よりもアクセスも利便性もある沖縄本島に行き、離島の島らしさを堪能したい層は奄美群島を始め、各地離島を訪れている、という感覚は一度は抱いたことのあるものだと思う。

その信憑性はいかんとして、与論島でいえば「めがね」の公開で聖地巡礼型の観光客が訪れたように、現在では雰囲気にあこがれたり、自分から何かを探したりするような旅行形態が現れていることは確かである。そしてここでの探される「何か」は大抵、人とのつながりであったり広く広報されないものである。

具体的にそういった観光客のニーズに合うものが何か、というと、それはおばあちゃん方が砂浜に露店を出して売っている手作りの貝のアクセサリーだったり、与論献奉の文化であったりするわけだが、どれも一つ決め手に欠けるところがあるし、ロコミで広まりづらい。この点、与論島では熱帯果実の生産に取り組んでいて、農協では六次産業化についても方向性を模索しているそうであるから、ここで熱帯果実のブランド化やスイーツ等の開発に力を注ぐことを提案する。近くに沖縄がある分最初は苦戦すると思うが、一つ強いものができればそのわかりやすい「島らしさ」に飛びつく観光客は多いだろうし、特に女性受けしそうでもあるので SNS での拡散も見込める。

これも私感ではあるが、与論島のお土産を選んでいいる際、ひとつこれといった定番がないように見えた。土産用の製品も開発してわかりやすい定番商品が欲しい。

ここまで勝手な意見ばかり述べてしまったが、与論島は当初想像していたよりもずっと美しく、エネルギーとルーズの混在した場所で、体験してみないとわからない類の良さがある。深くは触れられなかったが、人口減の対策にしても農業漁業の後継者育成にしても、結局はひとまず島を訪れて体験してもらうことが大切だと思う。その意味で観光と力を合わせることは必須になるだろう。十島村や長崎県五島市では一次産業に参入者に支援をしたり漁業研修生に研修補助費をバックアップした例もあるのでそういった自治体の例を見ながら着実に継続的な活動をするのが大切だ。

離島には離島にしかない強みがある。陳腐だがそれは確かなことだ。それを新たな枠組みで考え直すことが、与論の活性化への手がかりになるだろう。

※[http://www.yoron.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c\\_id=22&id=47&flid=10](http://www.yoron.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=22&id=47&flid=10) (与論町町勢要覧平成 27 年度版)